

官邸崩壊

高嶋哲夫

第四回

第三章 要求

4 (承前)

ライアンは中ホールのドアの前に立っていた。

プリンセスはまだ見つからない。いったいどこに行った。急がなければ、アメリカ本土での動きに支障が出る。

「ヘリが近づいてきます」

無線から部下の声が聞こえる。屋上の部下からだ。

「南東方向から進入し、官邸正面に向かってきます」

「ポリスカ、軍用ヘリか」

「民間のものです。日本のマスコミでしょう」

「用意はできているか」

「いつでも大丈夫です。指示があり次第、撃墜できます」

「ポリスカもヘリは把握しているだろう。今頃大騒ぎだ。十分引き付

けてから撃墜しろ。ここに影響のないところで」

アレンがやってきた。目が赤く顔色は悪い。

「これ以上、犠牲者を出すことは許せない。私からアメリカ本土に話す。電話回線をつないでくれ」

「アメリカ本土もすべて了解している。あんたは黙って見てろと言つただろう。これ以上騒ぐと、容赦はしない」

三階のエントランスホールから騒ぎ声が聞こえてくる。

「なにかあるのか」

「あんたも、現実を見ておいた方がいいだろう」

ライアンは階段のほうに歩き始めた。

エントランスホールの窓際には迷彩服の男たちが集まっていた。

官邸正面の窓は中からは見えるが、外から中は見えにくい作りになっている。

明け始めた空にヘリの機影が見え、近づいてくる。

「どうするつもりだ」

アレンのかすれた声が聞こえる。

機影はさらに近づき、高度を下げてきた。

突然、ヘリが旋回を始めた。官邸から遠ざかろうとしている。何かに気づいたのか。

視野に白線が入ったかと思うとヘリに向かって飛行していく。迎撃ミサイルだ。

「やめる」

アレンの悲鳴に近い声が響いた。

「どここのへりだ」

横田は指揮車に乗り込み、車内に設置されたモニター画面に向き合っている部下に聞いた。その一つに近づいてくるへりの機影が映っている。

隣の画面には官邸の全容が映し出されている。付近の高層ビルの屋上にカメラを設置して、望遠で映した画像が送られてくるのだ。

「テレビ局のへりです。やっと連絡が取れました」

「直ちに引き返すように言ってくれ」

部下は無線機に向かって、横田の言葉を繰り返した。

へりの高度が下がり、さらに近づいてくる。

官邸の屋上に数人の人影が現れた。へりの方を指さして、何か言いつ合っている。

「屋上に人影が見えます。何か持っているようです」

「持っているのは地对空ミサイルだ。へりに伝えろ。急げ」

屋上の男が肩にランチャーを構えた。ミサイルが発射された。

へりが急旋回を始めた。そのへりを追跡してミサイルがカーブを描いて飛行していく。

明日香は窓にしがみつくようにして、明るみ始めた空を見ていた。無線機がへりの接近を告げるテロリストたちの声を拾っている。

その中に、ミサイル、屋上、撃墜という単語が聞こえる。

南の空と言っていた。東京湾方面から飛んできたのだ。

「ヤバイ。テロリストは地対空ミサイルを持っています」

明日香は声を上げた。

エントランスホールに積み上げられた箱のいくつかにそう書いてあった。

「起こしてくれ」

高見沢の声で、明日香は身体を支えて空の見える位置に移動させた。

高層ビルの間にはりの機影が見え始める。

「なんとか知らせなければ。テロリストは地対空ミサイルを持っています」

「どこのへりだ。ボディに所属が書いてないか」

「まだ見えません。おそらくマスコミのへりです。警視庁はこんな馬鹿なことはやりません」

「なんとかしてテロリストがミサイルを持っていることを知らせるんだ」

「すでに、手遅れです」

窓の一角に白煙を引いて飛行する飛翔体が見えた。ミサイルだ。ゆったりしたカーブを描いてへりに向かっていく。

外が騒がしくなった。

遠山はビルを飛び出して道路に出た。

道路には数百人のマスクミ関係者が空を見上げている。

東京湾の方から、ヘリのローター音とともに黒い点が近づいてくる。

「ヘリだ。警察がこの状況で飛ばすはずはない。どこの社だ。バカをやったのは」

ヘリは南方向から飛んできて、大きく旋回して官邸正面に向かうとしている。

「くそっ、これじゃ報道協定もないじゃないか」

ヘリの高度が落ちる。官邸に近づいたのだ。そのとき、高層ビルの上に白煙が見えた。

「ミサイルだ。ヤバいぞ、これは」

高度を下げていたヘリが急旋回を始めた。その機体目がけてミサイルが突っ込んでいく。炎が上がり、いくつかの破片が飛び散る。

ヘリは炎と黒煙の塊になり、高度を下げていく。

「こっちに来るぞ。逃げた方がいい」

道路いっぱいに広がっていた人たちがビル内に逃げ込んでいく。

カメラでヘリを追っていた者も、後ずさりしている。火炎の塊となったヘリは、記者たちの頭上を通りすぎて、六本木の方に消えていった。

遠山は茫然と空を見上げ、立ち尽くしていた。

警視庁、対策本部の空気は凍り付いていた。ほぼ全員が立ち上がり、前方のディスプレイを見ていた。炎に包まれたヘリが墜落していく。あれは六本木一丁目方面か。

「すでに消防と警視庁が墜落現場に向かっています。被害の詳細は分かり次第報告するよう伝えていきます」

警視総監が受話器を持ったまま言うが、声が震えている。民間人に被害が出たのだ。

「官邸周辺には二度と近づかないように、報道関係に伝えてください。周辺の高層ビルにも警官を配置して、危険な行動を取るマスコミは見つけ次第拘束すると伝えてください」

梶元が強い口調で言った。

そのとき複数の電話が鳴り始めた。

「テレビ局のヘリはアークヒルズのビルに衝突し、ヘリの乗員、パイロットを含め四名は全員死亡。ビル周辺にいた五十六人が重軽傷を負いました。死者もいるようですが詳細は不明です」

受話器を持った職員の声が響いた。

「墜落地周辺の映像に切り替えます」

声と同時にディスプレイの一つに、地下鉄六本木一丁目駅周辺の映像が現れた。ビルの一角が大きく崩れて炎と煙を上げている。その下に、ローターの取れたヘリの残骸が横転していた。あたりは崩れた壁面や看板が散らばり、横たわる人や座り込む人で騒然としている。

梶元はきつく目を閉じたが、思い直してその光景をまぶたに焼き付けるように見つめた。

5

明日香たちは、四階をテロリストが搜索して立ち去ったのを確認して、来たときと同じように四階に戻ってきた。

無線を聞いていたスーザンが顔を上げた。

「拘束されていた男が発見された。明日香が迷彩服を奪った男。自力で拘束を解いて這い出してきたようよ」

明日香の動悸どうきが速くなった。分かっていたことだが、現実になるとショックだった。やはりあのとき――。

高見沢が明日香を見ている。

「申し訳ありません。私の責任です。殺しておくべきでした」

「忘れろ。おまえがいなかったら、俺もとっくに死んでる。今は外部との連絡と脱出のことだけを考える」

「そうよ。あなたは最高によくやってる。元気を出して。待って、無線が聞こえなくなった」

スーザンが無線機を叩きながら言った。

「奴ら、無線機を切ったんだ。おまえに拘束された男から、無線機が奪われたことを聞いた」

「植木鉢のマイクはまだ見つかってない」

イヤホンからは中ホール付近の声が聞こえてくる。

明日香はスーザンにイヤホンを渡した。明日香の英語力ではスラング混じりの早口の英語はほとんど聞き取れない。おまけに複数の声がまざる。

「女に衣服を取られたマヌケに、どんな女だったか聞け、と言ってる。プリンセスの写真を見せて確認しろって」

スーザンがイヤホンで聞こえる会話を繰り返した。

「プリンセスって一体何者なの。テロリストは総理や国務長官より、その女を探してるんじゃないの」

「迷彩服を奪ったのは、写真の女じゃないと言ってる。覚えているのは下着だけの女で、髪は短い黒髪。東洋系で身長は百七十センチくらい。近づくたびに蹴りの後頭部を蹴られた。格闘技の経験のある女だって」

スーザンが明日香に眉を吊り上げながら、続けた。

「プリンセスは必ず官邸内にいるから、探し出せ、と言ってる。残り三階から一階」

「よほど重要な女らしいな。しかし人質の中にいないとすると、我々同様、官邸内に潜んでいるというのか」

高見沢が言う。彼もスーザンの英語は理解している。

「スーザン、あなたは心当たりないの。国務長官にずっと同行してたんでしょ」

「女性も政府スタッフを入れて二十人以上いたけど、そんな重要人

物のことは聞いてない」

「テロリストたちは、日本かアメリカにすでに要求事項を伝えたのか。よほどの要求だ。あれだけの警護官を殺し、さらにS A Tもやった」

「ヘリまで撃墜した。搭乗員はもとより、墜落場所ではもつと被害者が出ている」

「これじゃ、俺たちがここにいる意味がない」

高見沢が呻くうめような声を出した。明日香はもう一つのイヤホンを耳に挿した。

イヤホンからはヘリの撃墜を喜ぶテロリストたちの声がまだ聞こえている。

「これで、奴らも懲りこただろう。S A Tも撃退したし、ヘリも落とすんだ」

スーザンが訳さなくても意味はつかめた。

「警部補は外部との連絡を続けてください」

明日香はイヤホンを外して立ち上がった。

「プリンセスについて調べに行くのか。しかし、迷彩服の女が紛れ込んでることはテロリストに知られている」

「本当にプリンセスが目的なら、クイーンクイーンの解放につながるかもしれない」

「警護官控室のロッカーのカギだ。下に降りる前に寄って行け」

高見沢が胸ポケットからキーを出した。ロッカーに何が入っている

るか聞こうと思ったが、高見沢の顔を見てやめた。額に脂汗が滲み、口を開くのさえ苦しそうだ。

「これを持って行け。何かあれば報せろ」

さらに高見沢が、イヤホンを明日香に投げた。

「今度は情けはかけるな。必ず自分たちに降りかかってくる。おまえに言っても、無駄なようだが」

明日香は答えずドアの前に行った。

ドアをわずかに開けて、誰もいないことを確かめると、間をすり抜けるように廊下に出た。

廊下の真ん中を歩いた。監視カメラの死角部分は把握していたが、廊下を歩く限りは、監視カメラからは逃れようがない。だったら、堂々と姿をさらした方がいい。サングラスをかけて野球帽を目深にかぶれば、顔の半分以上は見えない。仲間からはぐれたテロリストだ。

明日香は警護官控室に入った。奥にカギ付きのロッカーがある。

中に発煙筒と閃光手榴弾のケースが入っていた。

「こんなものを置いてたんだ。さっさと行ってくればいいのに」
上着とズボンの両側のポケットに入るだけ入れた。動きにくくなるが、強力な助けになる。

エレベーターまで行って乗り込んだ。

短機関銃を構えてドアが開くのを待ったが、二階でドアが開いても誰もいない。

中ホール付近は前よりあわただしさを増し、人員も増えている。プリンセスの搜索全力を注ぎ始めたのか。それとも次の計画が始まっているのか。

ライアンは地下の制御室に降りた。

壁一面に並んだモニターの前に行く。

「プリンセスは見つかったか」

「まだです。地下から探しているのですが」

監視カメラのモニターを切り替えている部下が答える。

「女が官邸内をうろついている。迷彩服に野球帽を着用。百七十センチ以上。やせ型。髪は短髪で黒。短機関銃を持っている。見つけたら報告しろ。すでに一人やられて、迷彩服を奪われた」

ライアンはマイクを持って官邸内に呼びかけた。この声は女にも聞こえているはずだ。これで、女もうかつには官邸内を動き回ることはできない。後は忍耐と頭脳戦だ。負けるわけにはいかない。

女は警護官の一人だろう。ということとは、新崎総理の警護官だ。

ライアンは二階に上がった。

「新崎総理を連れてこい。通訳もだ」

部下に指示した。

横田は指揮車の中からモニターに映る官邸を見ていた。

朝日を浴びた日本的で優美な姿からは、中で起こっていることは

とうてい想像できない。

モニターを睨んでいた部下が横田の方に向き直った。

「官邸の四階からレーザー光が発信されています。どうやらモールス信号、SOSのようです」

「拉致を免れた者がいて、官邸に潜んで信号を送ってきているというのか」

「分かりません。私もモールス信号はSOSしか分かりません。高校時代にアマチュア無線をやっている友達がいて、覚えさせられました」

横田はモニターに顔を近づけた。確かに赤い点が点滅している。

「おそらく、警護官の一人でしょう。警護官の中にモールス信号ができる者がいたかどうか問い合わせています」

他の部下が受話器を耳にあてている。

「絶対にテロリストに悟られないようにしろ。信号を送っている者の生死にかかわる問題だ」

「警護課の高見沢警部補がモールス信号を知っているそうです。彼は新崎総理の警護官です。送っているのは、おそらく彼。官邸の中でまだ拘束されていないということでしょう」

電話をしていた部下が言った。

「他にモールス信号を知っている者はいないのか。彼と通信ができる者は」

「いま呼び寄せています」

警察の通信担当には、非常時に備え、和文モールの理解する無線通信士が無線技士が何人かいる。

「しかし、こつちから信号を送ると、テロリストに悟られる恐れがあります」

「分かってる。今、考えている」

横田は官邸の四階で点滅する小さな赤い光を見つめた。

明日香は動きを止めた。

「見つかった。彼らサングラスに野球帽の女を追ってる。明日香は今、三階のエントランスホールに続く廊下にいるんでしょ。そつちにテロリストが向かっている」

マイクから聞こえるのはスーザンの声だ。

「中ホールにも連絡がいつてる。サングラスに野球帽、迷彩服を着た細身の女。あなたの場所は、監視カメラでとらえられている。一度、監視カメラの視野の外に出て、帽子を脱いで敵の中に紛れ込むしかない」

明日香は監視カメラの位置を確認すると短機関銃を向けた。激しい銃撃の音ともにカメラが吹っ飛ぶ。

「女はエントランスホールに向かう廊下だ」

「逃げ道はない。逃がすな」

怒鳴り声とともに足音が聞こえ始める。

走りながら発煙筒のピンを抜いて転がし、廊下の角に身体を伏せ

た。

煙が上がり、辺りは怒鳴り声や、走り回る足音で騒然とし始めた。

明日香は走りながらサングラスと野球帽を捨てた。

「敵が侵入した。複数だ。機関銃を持っている」

明日香は英語で怒鳴り、短機関銃を天井の電気と監視カメラに向けて撃った。

電灯が碎け散り、辺りは薄闇に包まれた。明かりはエントランスホールから洩れてくる光だけだ。薄闇に煙が広がり、辺りはほとんど何も見えない。明日香は走りながら監視カメラがあつた方向に銃口を向けて引き金を引き続けた。

周りで、銃声が響き始めた。

階段から駆け下りてくるグループがある。上の階を調べていた者たちだろう。

最後の一人の襟首えりくびをつかんで引き倒した。短機関銃の銃床じゆうしようで殴りつけると動かなくなった。そのままホールの片隅に引きずっていく。

介抱かいほうしている振りをして、ポケットを探った。

プリンセスの情報になるものを探したが、何もない。迷彩服を奪った男と同様、身分証など身元の分かるものは持っていない。

スマホとマガジンを三個奪って、その場を離れた。スマホの情報を外部に送ることができれば、何か分かるかもしれない。階段に向かいながらスマホを操作したが、ロックがかかっている。

迷ったが引き返して、倒れている男の指でボタンを押していった。右手の中指で画面が開いた。足音が聞こえ始めた。指の第一関節にナイフを当てたが自分にはできそうにない。

辺りが明るくなった。大型ライトの光が中ホールの前を照らしている。視界を遮っていた煙も半分が拡散していた。

「落ち着け。私は訓練を受けた警護官だ。必ず任務を遂行する」

明日香は口の中で呟きながらスマホを握り直した。

何度か失敗しながらも指紋認証の設定画面を出して、男の指をあてて解除した。

階段を駆け上がりながら、男のポケットにあったバンダナを頭に巻いた。

四階の高見沢とスーザンのいる部屋に戻った。

「助かった。あなたが知らせてくれなかったら、捕まって殺されてる」

「マイクが拾った声を伝えただけ」

「私がここに戻ったのを、監視カメラで見られてないかしら」

「官邸内のすべての監視カメラはモニターできない。三階に手一杯で見られていないことを祈るばかりだ」

眠っていると思った高見沢が目を開け、自信なさそうに言う。

「総理と国務長官、大使夫妻は、囚われてはいるが無事なことを知らせておいた。届いたかどうかは分からないが」

持っているレーザーポインターに目を止めた明日香に高見沢が言

った。

明日香はポケットの残りの発煙筒と閃光手榴弾を高見沢の前に置いた。

「もつと早く教えてほしかった。こんな便利なものがあるなんて。忘れてたわけじゃないでしょ」

「最後の手段だ。数も多くはない」

「私を信頼してなかったんですか」

「プリンセスの正体は分かったか」

「不明です。一人倒しましたが、身分の分かるものは何も持っていませんでした」

明日香はスマホを出した。

「中のデータを送ることができれば、テロリストグループの正体分かるかもしれません」

明日香はスマホを高見沢に渡した。

「気を付けてください。ロックがかかっていました。指紋認証です。

指は切り取ってきてませんか」

「残念だったな。今度は頼む」

「ロックは？」

「指紋認証でしたが、その場で解除しました」

「指は切れなかったというわけか」

高見沢はスマホを調べている。待ち受け画面は肩を組んだ若い男と女だ。持ち主と女友達だろう。

「ネットにつながっていないので、外部と連絡できない」

写真のアプリをタッチした。女性の顔写真が現れる。

「これって——」

明日香は息を呑んだ。横で高見沢も固まっている。真面目くさった顔のスーザンが明日香を見つめている。証明書に使われていた写真か。

スーザンが覗き込んでくる。

「あなたがプリンセスなの」

「やめてよ。私はスーザン・ハザウェイ。ワシントン・ポストの記者」

「でも、これって、あなたの写真。本当にテロリストに狙われる心当たりはないの」

「そんな重要人物になりたいわね」

高見沢が画面をスクロールした。今度は笑みを浮かべた、Tシャツにジーンズのスーザンの全身写真だ。間違いない。プリンセスはスーザンだ。次にあるのが、新崎総理とアンダーソン国務長官だ。

「三人だけだ。他の者の写真はない」

「よく考えて。大切なことなんだから。自分が何者なのか。私たちの命がかかっている」

明日香の言葉にスーザンの表情が引き締まった。

第四章 決断

1

新崎総理はライアンの前に立つと、背筋を伸ばし強い視線を送った。

ライアンが新崎を殴りつける。

よめいて倒れそうになる新崎の腕を、頬に絆創膏ばんそうこうを貼った通訳が支えた。力を入れて傷が痛んだのか、通訳が顔をしかめる。

ライアンを見つめる新崎総理の目は憎しみに燃えている。

もう一度振り上げた腕を、思い直したようにライアンが下ろした。

「おまえらの特殊部隊が地下道を通って侵入しようとした。だが、我々の地下道爆破で全滅した。それに懲りず今度はヘリだ。おまえの政府は総理を護ろうという気はないようだ」

「政府がヘリを送るはずはないわ。あれはマスコミが勝手にやったものでしょう」

ライアンと総理の言葉を通訳が震える声で伝える。

「それを統制するのも政府の役割だろう。できないのであれば、死者を増やすだけの無能な政府だ」

新崎は現在の政府の状況を考えていた。

おそらく指揮を執っているのは副総理の梶元だ。彼は慎重な男だ。ムチャは絶対にしない。いや、できない。慎重すぎるために、決断力に欠ける弱い政治家と見られている。だから大臣経験はあるが重要ポストには就いたことがない。副総理とは名誉職的なものだ。自分の政権で副総理に任命したのは、肩叩きの意味もある。そろそろ若者に道を開けてほしい。それが、こんなことになるうとは。

「政府に要求はしたでしょうね。政府の姿勢はテロリストとはいかなる交渉もしない。これは、曲げられないはず」

「それを曲げさせるのが我々の仕事だ。どんな手を使っても。今ごろ、政府は大騒ぎだ」

梶元なら情に流されるかもしれない。昔気質かたぎの人間だ。人命はいかなるものより重い、と本気で信じているかもしれない。それではまた、昔の日本に戻ってしまう。その言葉は真実だが、それがもたらす結果は単純ではない。

「いったい、何を要求したの。日本の総理として知っておきたい」

「五年間で十万人の難民受け入れと一億ドルの金の振り込みだ」

ライアンは要求内容をすんなりと話した。新崎は軽いため息をついた。

「数は異常だけど、難民受け入れは可能でしょう。世界は文句を言わない。でも、金銭の要求は拒否される。受け入れれば国際的に非難される。昔と同じになる」

「秘密裏に行えば問題ない。大した額じゃない」

「一億ドルが大した額じゃないと言うの」

「おまえの国にとつてはな」

一億ドルの武器とはどれほどのものなのか。何人の人を殺せるのか。さらに何人の殺人者を取り込めるのか。そう考えると、新崎はめまいを覚えた。

「そんな額、払えるわけがない。テロ活動の資金源になるのは分かっている。国際社会からは大きな非難を受ける」

「おまえの心配することじゃない。自分の命と他の人質の命の心配をすればいい」

ライアンが二人を大ホールに戻すよう部下に指示した。

警視庁テロ対策本部は落ち着きを取り戻しつつあった。

SATのほぼ壊滅とヘリの撃墜で、一時は騒然としていた。ヘリの墜落で判明した死者は二十名以上、負傷者は七十名を超えている。

梶元副総理は警視庁の会議室に設けられた国家安全保障会議に出ていた。

梶元は十分ほど前に届けられた現場対策本部からの報告について考えていた。「総理と国務長官、大使夫妻は生きている」と、レーザーポインターを使ったモールス信号で送られてきた。信号はそれつきり途絶えているという。テロリストに悟られると、送信者の身に危険が及ぶので返事は避け、口外はしないでほしいということだ。

「三十分後、国民に向けて演説をする」

「副総理自らですか」

梶元の言葉に財務大臣が口を開いた。

「私には、荷が重すぎると思うかね」

「そういう意味では——」

「政治家歴、三十七年です。衆議院では誰よりも長い。しかし、国民に向けて話すのは初めてです。国民も正確な現状を知りたいでしょう。責任ある者の口から直接に。メディアや評論家の推測より、正確で詳しい状況をです」

「かえってテロリストたちを刺激することにはなりませんか」

「そうならないように訴えるつもりです。私はなんとしても、総理以下、現在官邸内に囚われている者たち全員を無事に救出する意思があること、あらゆる手を尽くすことを訴えます」

「演説では——テロリストからの要求は公にするんですか」

梶元の迫力に、財務大臣が遠慮がちに聞いた。

「難民の受け入れ要求は公にせざるを得ないでしょう。金については——」

「国民に話すということは、世界に発信するということですよ。もう、後戻りはできません」

秘書の長森が梶元の背後に回り、おさか遮るように言う。

「覚悟の上です。法務大臣は至急、その準備に取り掛かってください。法的な問題を洗い直し、難民の受け入れ態勢を作ってください」

梶元の口調にはむしろ、積極的な感じさえる。

難民受け入れは、難民申請と難民認定の二段階で行われる。

難民申請は、法務省入国管理局で受理される。その申請に基づき、入国審査官が認定すれば難民と決定される。

難民と認められた場合は三年までの在留資格が与えられる。国民健康保険への加入、自治体の福祉支援、政府の委託団体による日本語教育や生活オリエンテーション、職業斡旋あつせんなどの定住支援プログラムを受けることが認められる。

「金についてはどうしますか」

「しばらく伏せておきましょう。国内は納得しても、世界は反発します。テロリストを説得して、なんとか回避するか、極秘裏に支払うか——しかし一億ドルとは大きく出たものです。秘密裏に行うには無理がある金額です」

梶元は独り言のように呟いている。

「やはりアメリカの状況を確かめたほうがいいでしょう。テロリストから要求は来ているのか、対処の基本方針はどうか。我が国だけが、勝手に突っ走る訳にはいきません。国務長官の命もかかっていきます」

梶元は顔を上げて、居並ぶ閣僚たちに目を向けた。

「至急、外務省から連絡を取ってください。私がドナルド大統領との電話会談を望んでいると」

長森が時計を見て梶元に耳打ちした。

「国民に副総理が直接状況を話すのなら、そろそろ用意をした方が

いいかと思いません」

梶元は頷いて立ち上がった。

明日香はスーザンとスマホの写真を見入っていた。

二人を睨むように見ている写真の女性はまぎれもなくスーザンだ。テロリストたちが必死で探しているのはスーザンなのだ。そして彼女は、明日香の目の前にいる。

「この服はいつのもの」

「忘れたわ。こんなの最近着たことない」

「じゃ、こっちは」

「去年の夏だったかしら。彼ら、どこからこんな写真を手に入れたの」

「あなたを捕らえるために、周到な準備をしてたってわけね」

明日香は考え込んだ。

横では高見沢が壁にもたれて目を閉じている。意識があるのか、ないのか。時折り苦しそうに顔をゆがめた。

「本当に心当たりはないの。テロリストに狙われるような。スゴイ特ダネをつかんでいるとか」

「そんなのがあれば、もっと有名になってる。私はただの政治記者。入社以来ずっと政治部で、取り立てて驚くような記事も書いてないし——でも、いつか必ず、そういう仕事をやりたいと願ってる。ピユーリッツア賞を取れるくらいだね」

スーザンは写真に何度も目を向け、考えながら言う。本当に心当たりはなさそうだ。

「あるのは野心だけか。なにか思い出したら教えてよ。テロリストたちの目的が分かるかもしれない」

「思い出したらね」

スーザンが自信なさそうに言う。

「このテロにつながりそうな写真とメール、通話履歴か。かけた相手はママやパパが多い。いちばん多いのはマリアだ。結婚相手か恋人だろう。いくつかある非通知の通話がテロ関係者か。これらのデータを警視庁に送りたい。方法を考えろ」

突然、高見沢が目を開けて言った。

「携帯電話を使用不可にする電波を出している機械を破壊するのが、いちばん確実に手っ取り早い方法です」

「大ホールに置いてある。破壊するにはそこまで行かなきゃならない。行けるのか」

「やらなきゃならないでしょ。髪まで切ったんです」

明日香はバンダナを巻き直して、立ち上がった。

「その前に、監視カメラのスイッチを切れないか。今まで発見されてないのが奇跡に近い」

「地下の管理センターに行かなければ、切ることはできません」

明日香は官邸の電気設備を頭に思い浮かべた。総理の警護官に決まって、一週間で官邸の図面と電気設備、通信設備、防犯設備に関

する資料を覚えさせられた。防犯設備の中には監視カメラも入っている。場所と死角になる位置もだ。だが監視カメラは死角を作らないように配置されている。今まではそのわずかに残された死角を中心に動いてきた。

「個々の監視カメラを破壊するしかありません。しかし——」

監視カメラを破壊すれば、その時点で居場所が分かってしまう。

「監視カメラを壊す前に、配電盤を破壊しろ。そうすれば監視カメラはすべてダウンする。その隙に監視カメラの破壊だ。その方が発見される可能性は低い」

監視カメラを破壊しておけば、配電盤を修理してもカメラは作動しない。

「配電盤は各階にあります。もしもの時に、全館がいつせいに停電にならないためです。あれを壊せば、各階の監視カメラはアウトです。まず、私が五階に行って、切ってきます」

「五階の電源が切れば、五階にいたことが分かる。修理も早い」

「同時に四階もやったら。敵を混乱させることができます」

「同時って——」

明日香の説明にスーザンが震えるような声を出した。

「あなたが五階の配電盤を壊すと同時に、私が四階をやる。テロリストが四階と五階に駆けつけている間に、私は三階に降りて配電盤を破壊する。そうすれば彼らには、私がどこにいるか分からなくなる。その間、あなたは五階の部屋に隠れて、騒ぎが収まってから

ここに戻って」

「私にできるの？ 配電盤がどこにあるかも知らないし、どこを壊せばいいかも分からない。第一、行き着くまでに監視カメラに見つかりそう」

「私についてきて。やり方を教える」

スーザンに拳銃を渡して、明日香は立ち上がった。

明日香は先に立って、監視カメラの死角を渡り歩きながら進んだ。それでも何台かの監視カメラには捉えられているはずだ。

「総理官邸には、テロリストに襲われたときに総理が立て籠もるシエルターはないの。ホワイトハウスにはPECO、バンカーと呼ばれる核シエルターを兼ねた避難シエルターがある。そこは軍ともつながっていて、戦時の指揮もできる。そこに籠もれば外からは絶対に開けられない」

歩きながらスーザンが聞いてくる。

「官邸は、総理と閣僚たちが政治を行うための場所。神聖な場なの。テロリストが占拠するなんて考えた人はいないんじゃないの。警備も日本では合法的に銃器を持つことのできるのは、警察官と自衛隊だけ。その他は許可を受けた登録制の銃器のみ。ハンターが持つ猟銃とかね。拳銃とか小銃は誰も持てない。だから銃犯罪は極端に少ない」

明日香とスーザンは給湯室の横で立ち止まった。

廊下の反対側の壁には配電盤がある。

スカイホテルの大宴会場に臨時に作られた記者クラブは騒然としていた。

数百人のマスコミ関係者が詰めかけている。

六本木交差点の方から、救急車とパトカーのサイレンがまだ聞こえている。

東京湾から飛んできたマスコミのヘリが、テロリストのミサイルを被弾し墜落した。ヘリは炎に包まれて、記者たちの頭上を通って六本木方面に落ちていった。ここから一キロも離れていない場所で大惨事を引き起こしている。

半数近くのマスコミ関係者がそちらに移動していった。何の新しい情報も入らないここで待つよりも、事件を伝えることができるかと踏んだのだろう。

遠山も迷ったが、若手記者に任せて居残ったのだ。

「テロリストたちに動きはないのか」

「政府に新しい動きはないのか」

残っている記者たちの中から、入ってきた政府関係者に向かって声が上がった。

「官邸のテロリストから副総理あてに要求があったそうです」

言うてから、しまったという顔をした。口がすべったのだろう。

「初耳だぞ。内容は何なんだ」

「私はよく知りません。副総理から国民に向けての発表があるはず

です。そこで正確に話すと思います」

「電話回線は切られ、携帯電話も通じない。方法はどうかやった」

「総理執務室から警視総監室へのファックスのようです」

「官邸から要求を送ったとなると、本物なんだろうな。電話回線がつながっているのか。その回線を使って官邸内部と話せなかったのか。総理を含めて、拘束されている者の様子を知りたいんだ」

「一時的に復活させたようです。ファックスを受信したときには、切れていたそうです」

遠山は考え込んでいる。金の要求があっても政府は発表しないはずだ。他の要求もあったのか。

「梶元副総理の国民に向けての緊急発表があるぞ」

声が上がると部屋の正面に設置されている大型モニターに会場中の視線が集中した。

国民に向けての放送は内閣府の会議室で行われた。警視庁で収録するという話もあったが、梶元が押し切った。国民にはあくまで政府主導で対応していると印象づけなければならない。

テレビ中継はNHKが行った。それを民間放送も含めて同時に全国に流すことに決まった。

梶元はテレビカメラを睨むように見つめた。長森はもつとりラックスすべきだと言ったが、その顔が精いっぱいだった。

「国民の皆さん、我が国は現在、非常に苦しい状況に陥っています」

テレビカメラを見つめたまま固まった。要点を書いたメモを目の前に置いてはいるが、言葉が出て来ない。

長森が原稿全文を書いて読むべきだと言ったが、時間がなかった。梶元も自分の言葉で訴えたかった。

「ついに、我が国もテロからは逃れられないという現実には直面しました。皆さんもテレビや新聞、その他のメディアによってご存知のように、昨夜より新崎総理はテロリストたちに、官邸内に拘束されています。政府はあらゆる手段を講じて救出を試みています。しかし、思うように進んでいないのが現実です」

直前までテロリストの要求について話すつもりでいたが、かえって国民を混乱させると思い始めていた。この問題は賛否が分かれるに違いない。

「現在、官邸には総理をはじめ、外務大臣、アメリカの国務長官、駐日アメリカ大使夫妻以下、官邸職員をはじめ百名近い方々が拘束されています。我々はその全ての方々の救出に全力を尽くします」
突然言葉が途絶え、涙があふれてきた。既に警護官やS A Tに多くの犠牲者が出ている。自分の決断の失敗だ。彼らの家族もこのテレビ中継を見ているに違いない。そのままテレビカメラを見つめていた。

自分は国家のトップには失格だ。このようなときに、涙が出るとは。この危機を乗り切ったら、政治家を引退しよう。新崎総理もそのつもりで、自分を副総理に任命したはずだ。

「今後も、最良と思える対策を取っていくつもりです。どうか皆さんも冷静さを保ち、テロには屈せず、我々政府と一体となって、人質救出へのご協力をお願いします」

梶元は深々と頭を下げた。

2

大統領執務室には、首席補佐官と国務副長官がいた。

ドナルド大統領は執務机に座り、眉根を寄せて二人を見ている。

「日本の総理官邸を襲ったテロリストの一味は、アメリカ国内にもいると考えた方がいいのですかね」

国務副長官が皮肉を込めて言った。彼は現在、長官代理だ。

いつもなら怒鳴り付ける大統領も、黙り込んでいる。

彼の脳裏には、ボイスチェンジャーによって変えられた電話の音がまだ残っている。

日本の総理官邸での国務長官の拉致など重大事項ではないのだが、今回はそう言っていられない。国務副長官の言葉が現実味を帯びているのだ。

「連邦政府には、日本の官邸占拠に関する電話やメールが殺到しています。その半数が実行犯を名乗る者からの金銭要求です。残りが情報提供者です。現在、それらのすべてに国家テロ対策センターが中心となり、FBIと地元警察を動員して捜査しています。ほぼす

べてデタラメ情報ですが、放っておくわけにはいきません」

「どさくさに紛れて、身代金と称して金をせしめようとする悪党たちだろう。こういう犯罪は、国家反逆罪に該当する重罪にすべきだがいちな。最高刑は死刑だ」

首席補佐官の言葉に、大統領は吐き捨てるように返した。

「しかし、ジェームズ・レポートの公表というのは何が目的でしょうか。こういうことを言い出すのは環境保護団体かオイルメジャーの連中か。シェールオイルの開発中止ともなれば、国のエネルギー政策の見直しが必要になります。企業の損失も数十億ドルにおよぶ。譲れないでしょうな」

「日本の総理と我が国の国務長官を犠牲にしろと言うことか」

「そうは言っていません。他にいい方法があれば、それに従うべきです。大統領はアンダーソン国務長官とは長年の友人でしたな」

「助けてやりたいが、テロリストとの交渉は原則しないことになっている」

「そうです。テロリストの要求には断固拒否を貫きましょう」

大統領は答えない。

立ち上がり、手を背後で組んで窓の前に立って庭を見た。

大統領にしては珍しく物静かで、どこか孤独で寂しそうにも見える。

「なにか別に考えておいでですか」

「テロリストとは交渉しない。ただし、表向きにはだ。だが、この

まま国務長官を犠牲にするには、問題が多すぎる。何とか救出したい」

自分でも思いがけない言葉だった。

部屋の人たちの視線が大統領に集中している。自分はおかしなことを言っているのか。たしかに、あの電話の最後の言葉が影響している。

男は確かに、スーザン・ハザウェイの名前を出した。何者だその女は。考えたが、やはり思いつくのは一つだ。テキサス、そしてハザウェイ。記憶の片隅に残っている。

「ジェームズ・レポートについて、もう一度詳しく話を聞きたいプロジェクトに詳しい者をよこしてくれ」

ドナルド大統領は執務机に戻り、椅子に深く腰を下ろした。

一瞬、意識が薄れかけたが、氣力を振り起して背筋を伸ばした。

一時間後、ワールド・エナジー・カンパニーのワシントンDC支社長が若手社員を連れて現れた。

若手社員は、両手で資料ファイルを抱えている。ホワイトハウスは初めてらしく、かなり緊張していた。

説明はベリーという若手社員が行った。

シェールオイルというのは——と話し始めたので、アラスカで新しく開発を進めているプロジェクトの問題点について話すように言った。

「大規模プロジェクトだが、問題が発生しているのか」

「土壌汚染についてですか。かなり被害が出ていることは事実ですが、対策も進んでいます」

シエールガス、シエールオイルの掘削方法くわくは最先端技術だ。

垂直に掘った縦穴の先端から水平掘りを行い、水圧破碎、マイクロサイズミックといった最新技術が組み合わせられて、シエールオイルとガスの採掘が行われる。

まずドリルで地下に垂直に二千から三千メートルの深さにあるシエール層まで縦穴を掘る。次にシエール層に沿って直径二、三メートルの横穴を水平に掘っていく。長さは二キロほどに及ぶこともある。

その後、縦穴と横穴に、砂粒状の物質であるプロパントや数百種類の化学物質を混ぜた特殊な液体を注入し、五百から一千気圧ほどの圧力をかけて岩石に割れ目を作っていく。このような水圧のかかる箇所を五十メートルから百メートル間隔で調節する。

この水圧破碎によって、岩石に閉じ込められていたメタン分子が流れ出てくる。

こうした工法により地下水が汚染され、それを飲んだ牛や羊などの家畜が死に、人間にも影響が出始めたのだ。

「対策とは何だ」

大統領の質問に支社長がベリーを押しつけて立ち上がった。

「被害者家族には賠償金として一律、十二万ドルが支払われていま

す。さらに、町の移転計画もいくつかあります」

「町の移転だと。被害はそれほど大きいのか」

「プロジェクト自体が今までになく巨大ですから」

「賠償金が支払われた家族は何件だ」

「現在までに十四件です。裁判中は七十八件ですが、この種の事件には時間も金もかかります。普通、訴訟は五年以上、裁判費用は十萬ドル以上。最終的には示談で決着するのがほとんどです」

「そんな話は聞いてないぞ。二年前は大きな問題はなかったのではないか」

「流し込む液剤をさらに効率のよいものに変えました。異常が開始めたのはそれからです」

「だったら、中止するか元の液剤に戻せ」

「設備も変えたので、元に戻すことはできません。対策装置をつけると莫大な損失ばくたいが出ます。さらに今中止すると、損失は計り知れませんが

支社長は大統領の反応を見るように、顔を見つめて話している。

「どういう症状が報告されている」

「手足の震えと白血球の減少です。数人の子供たちに現れました」

「その子供たちはどうなった」

「一人の女の子は死亡しました。他の子供たちはシアトルの病院に移送し、入院させました。今は家族ともどもシアトルに住んでいま

「死んだ子の親からは何も言っただけでなかったのか」

「裁判中に娘は死亡。母親も入院していました」

「母親の病状はどうなんだ」

「娘の葬儀の翌日、自殺しました。極度の鬱状態うつでした」

大統領は支社長の首をつかみそうになったが。かろうじて我慢した。

「その一家に他の家族は。父親はいないのか」

「和解金を支払いました。五十万ドルです。新しい生活が取り戻せる額です」

「それで、取り戻したのか」

「我々は存じません。父親は地元の高校教師でしたが、現在行方は不明です。家はそのまま放置されています。あの辺りじゃ、売るに売れませんから」

「町の移転が行われたのは何ケースだ」

「ゼロです。あのあたりの町は、シェールオイル、ガス掘削工場に勤めている者が大部分です。ただ、五年もすればさらに新しい掘削方法の開発で被害も軽減すると思われれます。ですから、賠償問題が発生してもプロジェクトは進んでいます」

「全面中止と対象地区の全家庭への賠償は考えてはいないのか」

「それはありません。費用は数百億ドルにおよび、会社は破たんします。そうなれば、影響はアメリカのみならず世界に及び、破たんの連鎖が起きます。一企業の破たんではすみません。リーマンシ

ヨックの再来です」

ワールド・エナジー・カンパニーの支社長は三十分あまり説明して帰っていった。

日本の官邸を占拠しているテロリストはイスラム過激派ではなく、環境保護を掲げる過激グループだということなのか。だったらなぜ、アメリカではなく日本で行動を起こしたのか。

大統領の脳裏では、電話の声と支社長の声が重なり渦巻いている。

明日香はスーザンと四階の部屋を出た。

部屋の前の廊下をカバーしている監視カメラは二台だ。五階と四階は総理執務室と閣議室があるので、要人の出入りも多く、監視カメラは嫌がられている。秘密裏の訪問を望む者も多いのだ。明日香とスーザンの姿が今まで発見されていないのは、それが幸いしているのかもしれない。

「ちょっと待って」

明日香はスーザンの腕をつかんで、事務室に入っていく。

壁際のロッカーの扉を次々に開けていった。

「これに履き替えて。少し小さいかもしれないけど」

明日香はスーザンにスニーカーを渡した。

「他人の靴なんて履いたことない。おまけに男ものよ」

顔をしかめたが、明日香の靴を見て履き替えた。明日香は数倍汚い軍靴ぐんかを履いている。

「どっちにする」

今度はスーザンがバットとゴルフクラブを差し出した。職員ロッカーで見つけたものだ。

「配電盤を破壊したら、監視カメラを叩き壊していくんでしょ。銃より静かだし、私にとっては確実よ」

「あなたはどっちを使いなれてる」

スーザンはバットを取った。

明日香は監視カメラの死角の場所を選びながら配電盤まで行った。スーザンが後に続いている。

スーザンに配電盤の開け方と切断する配線を教えた。配電盤さえ破壊すれば監視カメラはダウンする。あとは自由に動くことができる。

「まず五階の配電盤まで行って配線を切る。次に監視カメラを破壊する。五階と四階には各階に五台の監視カメラが付いている。今から五分後、あなたが配電盤を壊して、監視カメラを破壊する。私は八分後に同じことを始める。終わったらあなたは四階に戻って警部補とともに待機する。私は三階に向かう。上がってくるテロリストがいれば、何とかする。分かった？」

「同じ人物が五階から下に向かって、監視カメラを破壊していると思わせるのね。そうすればテロリストは私たちが下に向かっていていると思って、四階は調べられない」

「そううまくいくといいんだけどね。彼らが上がって来る間に私は

下に降りる。一人でそんなに早くはできないんだけど、彼らには分らない」

明日香はスーザンの腕をつかんで時計が合っていることを確かめた。

「じゃ、五分後ちようどに、五階の配電盤と監視カメラを破壊して。テロリストはすぐに上がってくる。それは私に任せて。あなたは、四階に誰もいないことを確認して、警部補のところに戻るのよ。その頃には、私は四階を終わって、三階の監視カメラを破壊してる。四階を調べることはない」

明日香の合図で二人は分かれた。

八分後、明日香は配電盤を破壊した。五階に続き、室内の電灯が消え、薄暗くなった。ゴルフクラブで監視カメラを叩き壊していく。

三階から駆け上がってくる足音が聞こえる。テロリストたちが配電盤の異常を調べに来るのだ。

明日香は廊下の角に身を隠した。

ライアンは二階の中ホールに立って、部下からの報告を待っていた。プリンセスはまだ見つかっていない。

無線機が鳴り始めた。地下の管理センターからだ。

「五階の監視カメラがすべて消えました。配電盤に異常があったようです」

ライアンの耳元で大声が聞こえる。

「五階に行け。何が起こったか確かめてこい」

無線機を切ると同時に、さらに無線機が鳴り始める。

「四階の監視カメラが使用不能です。電灯も消えて、何者かが配電盤を破壊したのでしょうか。犯人は五階から下の階へと壊していると思われる。次は三階かもしれません」

「三階の配電盤に人をやれ。怪しい奴が来たら拘束しろ。抵抗したら射殺していい」

ライアンの指示で、短機関銃を構えた部下が階段を駆け上がっていく。

ライアンは地下の管理センターに下りた。

正面に並んだ監視カメラのモニター画面で、四階と五階の映像が切れて白くなっている。

三階はまだ見えていた。

「すべてのモニターを三階以下の監視カメラに切り替える。女が紛れ込んでいるはずだ。迷彩服に野球帽とサングラスの女だ。帽子とサングラスは取っているかもしれない」

一つひとつのモニターを目で追っていった。迷彩服の者たちが走り回っているが、該当する侵入者は見当たらない。

「配電盤周辺の監視カメラを重点的に監視しろ」

配電盤の前には短機関銃を構える数人の部下の姿が映っている。

(つづく)